

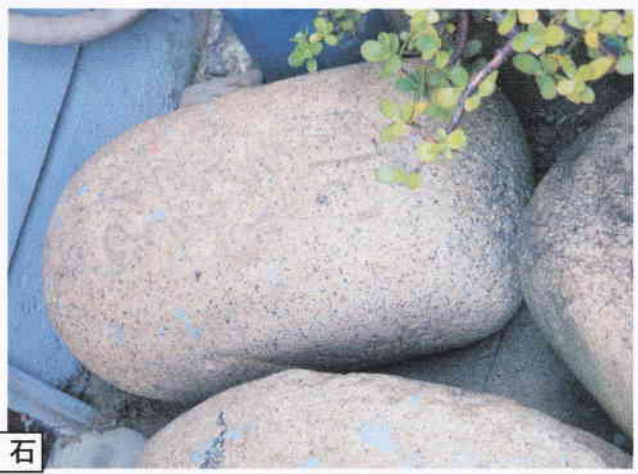
## 9 力自慢の石

泉佐野市本町

- ▶ いろは蔵が立ち並んでいた近くの民家に「力石」と呼ばれる石が置かれています。この町で力自慢大会に用いられたものと推察します。(地元の方に教えていただきました)



力石



## 10 旧新川家住宅

にいがわ

泉佐野市本町10-1

- ▶ 旧新川家住宅は、天明期(1781~1789)に建立され、佐野が栄えていた頃の住宅として残っている貴重な建築物です。仏間には日根対山(幕末期、当地出身の画家)の描いた襖絵があります。



### 日根対山(ひねたいざん)

幼い頃絵をはじめ、土佐派に学んだのちに南画を岡田半江、経学と書を貫名菘翁に師事しました。和泉佐野の豪商で文人としても知られる里井浮丘の庇護を受け中国絵画の技術を磨きました。また浮丘と関係した文人との交遊が生まれ、29歳で京都に移り、梁川星巖、藤本鐵石、中西耕石らと親交を結んでいます。円山派の影響を強く受け、南画家鉄翁祖門に私淑しました。主に山水画を得意としています。対山の作品のうち、孝明天皇がご覧になったという「桃花源図(とうかげんず)」が有名です。



山田家住宅にある対山の襖絵

### 山田家住宅

泉南市新家中村3148

寛文7年(1667)、山田新五郎が庄屋としてこの地に移住して以来、明治の初めに庄屋制度が廃止されるまで8代にわたり山田新五郎が新家の村を守ってきました。江戸時代から残る住宅建築遺構は歴史景観に優れた貴重な国民的遺産として平成14年(2002)に登録有形文化財に指定されました。

# 勝海舟、頼山陽訪問の地 岸琴泉(長五郎)邸跡

岸和田市宮本町

- ▶ 岸和田藩七庄屋のうちの一である岸琴泉(長太郎)は、文人画家としても才能を発揮しました。琴泉は画号で、ほかに桐齋、行恭、伯敬なども用いました。琴泉は絵を浦賀春禁師とし、主に山水画を学びました。また、頼山陽の門下生となり、儒学を学びました。頼山陽が、文政8年(1825)と同12年(1829)に岸和田を訪れた際、琴泉の家に宿泊しています。また、勝海舟も訪問した可能性があります。安政2年(1855)2月、幕府の海防視察で大久保忠寛に仕え岸和田を訪れました。郷土史研究家の玉谷先生によると、その時「浮船(沖船?)文右衛門」(岸和田市本町)の宿屋に止宿したという岸和田藩の役務記録に記載があるそうです。

梅谷卓司著の「渦潮の譜 岸和田藩儒・相馬九方と幕末の学者群像」(朱鷺書房)のP122より

土佐守(勘定奉行 石河政平)一行の宿舎は、大庄屋七人衆の屋敷にそれぞれ割り当てられている。夜に至り、九方はその内の一軒、岸長太郎邸へ勝麟太郎を訪ねた。見るからに、「選良」の人生を駆け抜けていく、端麗な雰囲気をも漂わせていた。しかも肩肘はらぬ座談から入ってゆく……



岸琴泉が描いた山水画



宮本町内にある公園



宮本町内の路地



宮本町内にある旧庄屋「和田家」

## 12 岸 琴 泉 墓 所 ( 正 覚 寺 )

岸和田市宮本町27

▶ 岸 琴 泉 の 墓 所 は 正 覚 寺 に あ り ま す 。



岸 琴 泉 墓 碑



吉田松陰の「発丑遊歴日録」には次のように記載されています。

二月二十六日

晴。相馬の宅を訪ひ、庄屋岸長太郎に逢ふ。岸和田は五萬三千石、七庄屋 中左近・根来藤右衛門・岸長太郎等 あり。是れ其の一なり。其の容貌を相するに、頗る自ら尊大なり。

## 13 儒 者 相 馬 九 方 住 居 跡

吉田松陰訪問の地

岸和田市北町16(市立中央保育所)

### 14 岸 和 田 藩 講 習 館 跡

▶ 嘉永6年(1853)2月23日、岸和田に到着した吉田松陰と森田節齋は、その日の夜、岸和田藩に招かれている儒者 相馬九方(そうまきゅうほう)の寓居先である岸和田藩校「講習館」を訪問しました。

松陰は「発丑遊歴日録」には次のような記載があります。

二十三日

晴。十四日より今日に至るまで富田林に滞まる。

又節齋に従ひ和泉の岸和田に至る。

岸和田は戸数三千許り。富田林を発し小阪を越え、左に篠山第を觀て過ぎ、南野田村を經、館林領なり。福町に至り午食す。

制令に云はく、小出伊織と。土生(はぶ)を經て岸和田に至る。

行程六里。四面皆菜畦麥畝(さいけいばくほ)、土地肥沃にして

生色蒼々たり。是の日、節齋は輿中に詩あり、云はく。

人情反覆雨耶雲	人情反覆雨か雲か、
気似吾樓獨有君	木吾樓(ごろう)に似たるもの獨り君あり。
他日勿忘河内路	他日忘るるなかれ河内の路、
輿中輿外共論文	輿中輿外共に文を論ぜしを。



相馬九方寓居跡

夜、相馬一郎を訪ふ、名は肇、字は元基。帰りし時は夜已に丑(午前2時)なり。相馬は教習館居り、館は官新たに造営し、以て一郎を居き、士農工商皆至りて業を受くるを許す。

講堂あり、老候手書の額に曰く、文行忠信。今候手書の額に「曰く、教習館と。一郎は本讃岐の人、三年、藩命に応じ、来りてここに客となる。禄十口、外に五口あり、然れども臣籍に列せず。

二十四日

晴。相馬來る。是の夜、又節齋に従ひて相馬を訪ふ、劇談旦(あした)に至り、あくる日の巳時(午前10時)を以て帰る。

吉田松陰は、嘉永4年(1851)12月15日、藩の許可を得ないまま脱藩して奥羽地方へ旅に出ます。約140日間に及ぶ旅を終え、同5年(1852)4月、江戸藩邸に戻りましたが、「萩へ帰国・脱藩罪として7ヶ月間の自宅謹慎(その後土籍剥奪)の処分を受けました。しかし、嘉永6年(1853)1月、「十ヶ年の遊学」の許可が出ます。嘉永6年(1853)1月26日、吉田松陰は長州萩を出発します。萩から江戸に至るまでの旅を日記「癸丑遊歴日録」として書き残しました。

海路で大坂に着いたのは同年2月10日でした。

二月十日

晴。暁に兵庫を発し、午時安治川口に達す、五里。河口は左右に柵を立て、町(ちょう)ごとに柱標を立て、幾番と云ふ。安治川口の水尾木(みをぎ:水路標識柱)は一番より十番に至る。暁に此れに至る、稍帆を用ふ。是の後は専ら櫓棹の力に倚る、岸上に家なきの所は即ち縄を以て舟を挽くこと亦數(數)町なり。安治川橋より下は萬橋兩傍に林立し其の幾千萬なるを知らず。橋より上は稍減ず。安治川橋を過ぎて上ること數(數)町、湊橋あり。湊橋の下にて、河の分岐するあり、是れを木津川と為す。越中橋を過ぎ、常安橋下に至りて碇を寄す。是れを土佐濠と為す。河口よりここに至る一里半なり。家書を裁す。夜は金毘羅祭日にて、高松藩邸の中に祠あり、人多く詣で拜す。余も亦造(いた)り観る。

松陰は翌日、大坂に上陸し、砲兵学者の坂本鉉之助を訪れ、その後は大坂城を一周し、後藤松陰を訪れて舟に戻っています。

12日は森田節齋に会うため、舟を後にし、大坂の「高津宮」「四天王寺」を横目で見ながら南下します。平野→藤井寺→野中→古市→春日→竹内(たけのうち)峠と約8里歩き竹内で宿泊します。13日は雨のち晴で、竹内を出発し五條の森田節齋宅を訪れます。しかし堤孝亭の邸に居ると聞き、その家を訪問します。森田節齋にやっと会うことができ、節齋の師である江端五郎の話で盛り上がり、そこで宿泊します。14日は森田節齋に従い出発します。道中増田久左衛門も同行し富田林の仲村徳兵衛の家を訪れました。23日まで森田節齋とともに仲村邸に逗留します。



吉田松陰宿泊の地「仲村徳兵衛邸」(富田林)

23日、富田林を発ち岸和田に来ます。2月23日から3月3日まで岸和田に逗留し、岸和田藩の志士、儒者など多くの人物と会っています。3月3日～5日は熊取にある中左近邸に。3月5日～17日まで泉州岡田にある山田文英の邸にて逗留。



吉田松陰宿泊の地「山田文英邸跡」(泉南市岡田)

岸和田に滞在中、吉田松陰は城下町の藩士や儒者を訪ねまわりました。宿所に帰ったのは午前2時でした。翌日、相馬九方が松陰の宿所を訪ね会談後、その夜、再度相馬九方の寓居先を訪問しました。

この時は夜を徹し、松陰が宿所に戻ったのが午前10時だったと「発丑遊歴日録」に書き記しています。2月26日にも相馬九方を訪ねています。その時には、岸和田藩の七人庄屋のうちの一人で、岸和田城下に住む岸 長太郎に出会います。

梅谷卓司著の「渦潮の譜 岸和田藩儒・相馬九方と幕末の学者群像」(朱鷺書房)のP113より松陰が相馬九方を訪れたときの模様が詳しく書かれています。

### 相馬九方

相馬九方は、讃岐高松に生まれ、中山城山に徂徠学を学んだ後、京都で学問修行を重ねました。

嘉永4年(1851)、京都の蘭医新宮涼庭の推挙によって岸和田藩の藩校講習館の教官となりました。

彼が初めて岸和田に来て元藩主長慎に面会した時、長慎より「人を知らざるを憂う」と認めた書を下されました。

「これまで貴方のような素晴らしい人物を知らなかったことが残念でならない」との意味です。

ペリー来航後の騒然とした政情の中で、九方は講習館において多くの人材を育てるとともに、藩政にかかわる意見も求められるなど、次第に藩政に深く関与するようになりました。

九方は藩主後継者をめぐるお家騒動に巻き込まれ、一時投獄されてしまいます。

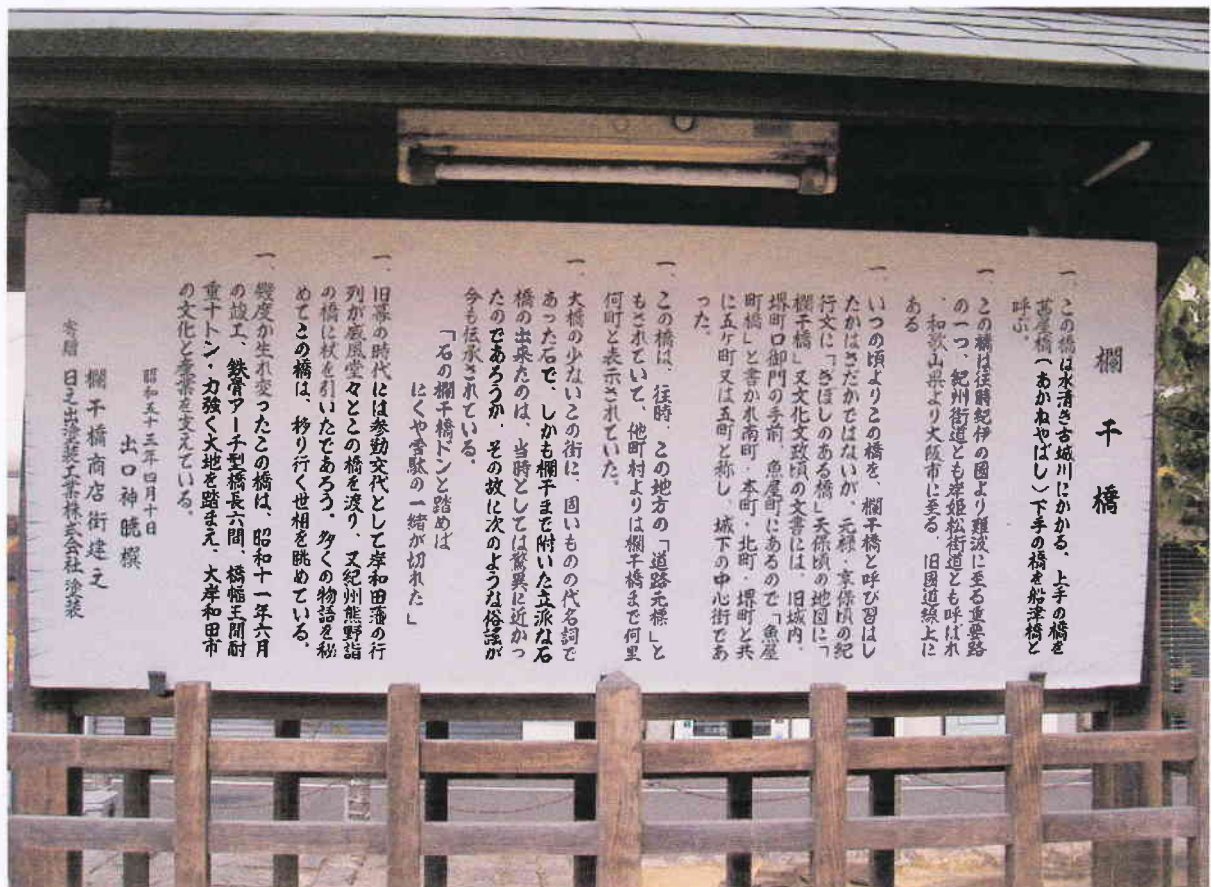
但馬国宿南村(現在の兵庫県養父市)で私塾「青谿書院」(せいけいしょいん)を開いた池田 草庵(いけだ そうあん)は、天保2年(1831)、村を訪れた相馬九方の教えを受けています。



相馬九方肖像画

## 15 岸和田城下の欄干橋

岸和田市津田北町



### 欄干橋

この橋は水清き吉城川にかかると、上手の橋を  
 甚麗橋(あかねやばし)下手の橋を船津橋と  
 呼ぶ。

この橋は後醍醐紀伊の國より難波に至る重要路  
 の一つ、紀州街道とも津姫松街道とも呼ばれ  
 和歌山県より大阪市に至る、旧国道線よに  
 ある。

いつの頃よりこの橋を、欄干橋と呼び習はし  
 たかはさだかではないが、元禄・享保頃の紀  
 行文に「さほしのある橋」天保頃の地図に「  
 欄干橋」又文化文政頃の文書には、旧城内、  
 堀町口御門の左前、魚屋町にあるので「魚屋  
 町橋」と書かれ南町・本町・北町・堀町と共  
 に五ヶ町又は五町と称し、城下の中心街であ  
 った。

この橋は、狂酔、この地方の「道路元標」と  
 もされていて、他町村よりは欄干橋まで何里  
 何町と表示されていた。

大橋の少ないこの街は、固いもの代名詞で  
 あった石で、しかも欄干まで附いた立派な石  
 橋の出来たのは、当時としては驚異に近かつ  
 たのであろうか、その故に次のような俗謡が  
 今も伝承されている。

「石の欄干橋ドンと踏めば  
 はくや雪駄の一緒が切れた」

旧幕の時代には参勤交代として岸和田藩の行  
 列が威風堂々としたこの橋を渡り、又紀州熊野詣  
 の橋に杖を引いたであろう、多くの物語を秘  
 めてこの橋は、移り行く世相を眺めている。

幾度か生れ変わったこの橋は、昭和十一年六月  
 の竣工、鉄骨アーチ型橋長六間、橋幅五間耐  
 重十トン、力強く大地を踏まえ、大岸和田市  
 の文化と産業を支えている。

昭和五十五年四月十日  
 出口 神 曉 撰  
 欄干橋商店街建之  
 寄贈 日之出造業工書林会社 塗装